

巻頭言

年頭所感

国際総合工学研究所としての2001年



所長坂内正夫

Masao
SAKAUCHI

あけましておめでとうございます。今年も皆様にとって良い年でありますように心からお祈り申し上げます。

さて、いよいよ2001年、新しい世紀の始まりです。そして今年には東大生産技術研究所にとっても記念すべき特別な年になります。新しい入れ物としての新キャンパスが完成し、その中身も「国際総合工学研究所」の名にふさわしいものとして一新されるからです。折しも、大学も各研究所もグローバル化する社会に対して、いかなる「知」の出力を、どんな個性で責任をもって出していくかが問われています。そして新しいキャンパスと国際総合工学研究所としての中身が、その問いへの我々生産技術研究所の解答であると考えています。

まず、新キャンパスの完成と移転。生産技術研究所は、発祥の西千葉の東大第二工学部から改組して約50年を迎え、この間長く六本木の地にありました。21世紀の生産技術研究所は、駒場IIキャンパス内の現在完成済の50,000 m²の新営を含む、開かれた東京大学の具現です。2001.4からは、そこに居を移します。

新しい皮袋に新しい酒をです！中身こそが重要です。以下、私の所長就任以来ここ3年間の中身の改革の方向性と成果を一部挙げることにより、それを示したいと思います。

これからの社会への価値創造、課題へのソリューション作りに貢献する独自の総合工学、即ち「育成型融合工学」を基本とする我々の新しい研究スタンスは、「場」に対応する社会・人間大部門、「物」に対応する材料・生命大部門、「情報」に対応する情報・システム大部門の3大部門化と、これらを束ねる研究戦略化機構としての6つの研究センター群の新体制の形での改組(2000.4)により一層加速されています。

「国際的」な研究活動は、関連の国際産学共同研究センターに加えて、新設のマイクロメカトロニクス国際研究センター(2000.4)、都市基盤安全工学国際研究センター(2001.4予定)の3つの国際研究センターをコアに推進されています。これに関連して、生研パリオフィス(2000.11)、バンコクオフィス(2001予定)も開設されました。

研究活動については、生産技術研究所におけるダイナミック融合工学の環境の中で生まれる先端的・独創的研究水準は、毎年確実に上がってきていると考えております。査読付き論文数の増加だけでなく、生産技術研究所の教官が代表者として推進する文部省のCOEや新プログラム、未来開拓研究、産学マッチングファンド、他省庁からの受託研究などの億単位の大型研究プロジェクトも現在、約17件を数えております。

社会・産業界へのアピールにも力を入れております。生産技術研究所を中

心とした「特別研究会」方式による、課題探査を含めた産業界との共同研究（1998年7委員会50社，1999年13委員会110社，2000年17委員会180社参加）や、生産技術研究所を中心にした2社のベンチャー企業の設立（1998年，IISマテリアル（資本金7000万円），1999年，宇宙情報処理研究所（同2億円））を行い，TLOによる技術移転活動も強化しております。社会への直接的働きかけも研究所活動の大きな柱です。本年度の研究所公開では，約4500名の参加者があり，また2000.7/8月に東京・ビッグサイトで開催された「21世紀夢の技術展」での生研ブースには8万人を超える参加を得ました。新聞等で取り上げられる研究活動成果の件数も1996年度170件，1997年度195件，1998年度278件，1999年度336件，2000年度約300件（11月まで）以上等と着実に増加しております。

生産技術研究所は，以上の成果を踏まえて，21世紀「大学が社会にとって何か」の答えを，より明確にアピールしていく決意をしております。皆様の御理解と一層のご支援をお願い申し上げます。

